

現代朝鮮文學選

1

創土社



現代朝鮮文学選 I

1973年1月1日初版発行

訳編／朝鮮文学の会 ©

発行人／井田一衛

印刷／太陽印刷工業株式会社

製本／有限会社イマキ製本所

発行／株式会社 創土社

東京都文京区水道1-10-1 TEL/812・5492

振替／東京 48661

定価 1,400 円

落丁・乱丁おとりかえいたします

現代朝鮮文学選 1

朝鮮文学の会訳

目次

司会棒 11

糞地 47

恨水伝 85

失証 137

摩天嶺 173

幸せな日に 223

黙示 247

いたち
291

青山宅
329

俗縁
399

馬鹿列伝
427

或るパリ
465

総督の声
503

解説／尹学準
531

司会棒／南廷賢
|| ナム・ジョンヒョン

風向きにしたがつて身を少しずつ揺り動かしながら、それでもろうそくの火だけはたくみにおのれの役割を果たしている、とウォンギユ（元圭）は思う。たしかにこの部屋の中で、少しでも生きているといった印象を与えているのは、ろうそくの火だけだ。そのほかのあらゆるものは、廃物と異なるところがなかった。まず、いままで一度も光ったこともなく、いつもそうしてさびしく天井にぶらさがっているだけのあの螢光灯や、終始音を出さず、かたわのように一日中ぼさっとすわっている電蓄、それに録音器。そればかりか、向いの壁にかかっている時計やあんま機はどうだ。これらは一様に金色のメイド・イン・ユー・エス・エーという文字だけをあざやかに浮かびたてせて、ほこりをすっかりかぶったまま少しも働く様子を見せないのだ。じりじりとうろろが燃えて流れる音だけが、時たま耳の底をかすめるだけだ。太古の沈黙を抱えて眠る、なにか天然物のように、まわりにあるあらゆる物は、ずっとこうして人間の手を待って、わけもなく放ったらかされているありさまなのだ。だが、どこに人間の手があるのか。ここを、すなわち四畳半がところの部屋一室を運営している、いわゆるその人間という名の主人公までが、実はどうしたことか、いま最も人間の手を待ちこがれているありさまなのだ。

さあ、見よ。しかし、無理に見ようと努力するまでもなく、ウォンギユの目にはいつもよく見えるのだ。家族という名目のもとに、ろうそくの火を中心にぐるりと輪になつてすわっている父や弟、それに妻に子供という人間の表情がだ。はつきりとよく見えてくる、というわけだ。喜怒哀楽の影響圏を完全に抜け出たようなその無表情な顔。こういう顔つ

きで、もの寂しくろうそくの火を中心にぐりりと輪になってすわっている家族の虚妄な状態を、ウォンギュはときどき点検でもするように、ひとわたりぐりりとながめて、思わず失笑してしまうことがあるのだ。彼らは明らかに人間ではなく、すてられた物のように無意味にただ空間を占領しているだけの、やっかいな一嵩の物にすぎないと思われるからだった。

しかし内容を少しでも知れば、彼らが、ウォンギュの思っているように、いつも無意味にすわっているわけではなかった。ウォンギュを含めて、彼らは少なくともいま重大な会議に出席している身分だからだ。実際には、何がそんなに重大な会議なのかについては、この会議に出席している彼ら自身でさえも詳しくはわかっていないわけではないのだが、ともかく一刻を争って解決しなくてはならない、そんな類の重大な問題があたりに山積しているという思いで、いつも押えつけられているように頭が重い彼ら。彼らはこの重い頭をやつと持ち上げて、まるで敗残兵のように、破れたぼろぼろの身なりで、肩をだらりとおとしたまま、夕方になればこうして顔を並べてすわるのだった。

ところでおかしなことは、彼らがこうしてろうそくの火を中心にぐりりと輪になってすわるやいなや、あらゆることを忘れてしまうということだ。不思議だ。ほんとうに、何ゆえに何のために家中の者がこうして整然とすわることになったのか、その動機や内容を彼らはことごとく忘れてしまいうらしかった。一人の人間を抱いた過去や現在や未来やの、時空の束縛から完全に抜け出た石頭。そうだ。ここではいちばんの年長者であり、しかも父

であり祖父であるトンムン（東文）先生を始めとして、彼の次男スングュ（昇圭）と娘ソンジャ（成子）、それに嫁や五歳になる孫の奴までが、またたく間に石頭になってしまふ感じなのだ。

いつさいの記憶を失った病人のように、それでも体だけは死んではないのだというように、目をぼんやりと開いてろうそくの火に向かって視線を集めている彼ら。彼らのこのあきれたありさまをぐるりと見回すたびに、ウォンギュはただ寒々とした思いになるばかりだ。この会議をとりしきることになった議長としての自分の位置を、ウォンギュは呪わしく思うのだった。

なぜそのとき一言のもとに「ノー！」と冷淡に断れなかったのか。

事実、家族だけが集まったこのこぢんまりした会議には、もともと議長などという役割はさほど必要なものでもなかった。しかし、たとえ小規模の会議であっても格式どおりととのえるものはとのえてこそ会議が円満に進行するものだ、というソンジャの発言を採択し、そのときあわただしく「議長」を選ぶことになったのだ。

その際、まず第一に候補にあがった人は、やはりトンムン先生だったのだ。先生は単に年長者だからというばかりでなく、学力や経歴などからみてすでに議長の座一つくらいはものにしていてあたりまえな方だということに、誰一人として異議がなかったからだ。しかしそのとき、トンムン先生はなにか思うところあってか、年老いて衰えた自分の氣力にかこつけて、議長職だけはやはり迫力ある若い層から選ぶ方がよいだろうと言っ

て、長男のウォンギユを見つめながら極力辞退しようとした。ウォンギユは、父がこういうのは、実はどこまでも円満な人格からにじみ出る謙讓の美德だと思い、現代では人生はいまや六十からだと言うのに子供達の前で何を謙遜しているのかと、もう一度議長職を引き受けてくれるように頼むつもりだった。しかし惜しいことに、そのときちょうど、ふいに出しゃばってきたスンギユの奴の突然の発言のために、ウォンギユのこうした考えはついに黙殺されてしまったのだ。

いつも万事傍觀者といったように、終始黙って床をながめてすわっているばかりで有名なスンギユが、このときだけは何の力に頼ってそんなに強く自己を主張できたのか、ウォンギユは考えても今もってわからない。そのときスンギユは、父のその辭讓の弁がまだ終らないうちに両手をさつとあげて積極的に賛意をあらわし、何を言うかと思うと、兄さんの學識や徳望は父さんに比べて確かに少々劣りはするが、なにひとつとして父のためによいことをしたことがない我々だから、今度だけは父の意志にすなおに従って、子としての道をおさめねばならない、と言いながら、脅迫するように兄のウォンギユをあからさまににらみつけるではないか。そして、スンギユは少し興奮した調子で、実はそういう世俗的理由からばかりでなく、議長職だけは当然、經濟的實權を握っている兄さんが引受けねばならないと主張したかと思うと、本人の意志もたずねないまま、突如立ちあがって拍手を送るのだった。

ああ、そのときおこった拍手の連鎖反應。スンギユがとくに力を入れて言ったこの經濟

的という言葉に、家族は恐ろかなり感銘を受けたのだろう。

妻のユナ（允我）を始めとして、父もソンジャも、それに五つになるチビの奴までが、なにがそんなにうれしいのか、しばらくの間、びりびりと壁や天井をとどろかすほどの拍手を送るのだった。

ウォンギュは少しあわてたが、しかしどうしようもなかった。大勢はすでに傾いていた。考えてみれば、このように拍手の波にまきこまれて、一度も辞退する間もなく回ってきた議長職に、ウォンギュは格別感興もなかったが、妻のユナは夫のこの突然の出世が大変満足な様子だった。

その日の夕方、簡単ながら妻の心づくしの祝賀宴の席上でも、ウォンギュが終始困惑した表情で、不肖この私が皆さんのために議長という重責にたえうるかどうか全く心もとないしだいだ、という心境の一端をうちあけるや、ユナはたちまち興奮した調子で、

「ああ、誰でも同じですよ。誰でも責任を持たせられればどうにかやっていけるものよ」
そう言いながら、自分の言葉の効果をみるように家族の顔を素早くながめわたすと、うれしい微笑がこぼれてくるのをかくすことができないのだった。

そのとき、じりじりと血管を上り、おもむろに胸にせまってくる感激のベルの音。ウォンギュは目がしらが熱くなった。久し振りにうれしさに酔ったユナのその美しい姿を目にするや、ウォンギュは妻という、言いかえれば女性という名の高等動物に関してわきあがってくる言いようのない失望と尊敬の念が交差して、いささか複雑な気持になると同時

に、鼻先がつんとしてきたからだった。ともかくそのとき、ウォンギュは久し振りにその輪郭をはっきりあらわしてくれた妻の美しい微笑を傷つけないためにも、議長職だけは自分の間固守せねばならないな、と思うのだった。考えてみれば、このように純然たる他人の意志でのみ決められた議長職に、なんで愛着や自負心がおこるはずがあろうか。ところで、ウォンギュはいま議長職への愛着心どころか、自分が議長であるというこの厳然たる事実までもすっかり忘れてしまっているかもしれないというのだから、いまや事はやっかいになっているのだ。そうだ。ずっとわけもなく放ったらかされている物のように、ろうそくの火に向かつてぼんやりすわったままのトムン先生やスンギュ、それにユナやソンジャと同様、いわゆるこの会議を管轄する議長までが自分の使命を、いやウォンギュはいま、自分が人間だということまでもすっかり忘れてしまっているのかもしれないのだ。悔恨も意欲もないまのびした顔。こういう状態にあつて、それでも司会棒だけは放さず、ろうそくの火をながめてすわっているウォンギュ。

しかし、彼らはろうそくの火をなにか救いの神としてあがめるためにそうしているのではない。ばくぜんとなりとも、ろうそくの火になにか期待をかけているものがないとすれば、おかしいことにそれはスンギュだけだ。スンギュをのぞいたほかの人は、すぐ目につくものがろうそくの火なので、ただぼんやりとその火をながめているにすぎないのだ。目の前にろうそくの火もなかったならば、彼らはいったい視線をどう処理しただろう。

いつからどうしてそうなったのかよくはわからないが、彼らはお互い同じ家族の一員で

ありながら、お互いの顔をながめることもできないかなしい立場におかれていた。父は子の、また子は父の顔を、そして兄は弟の、また弟は兄の顔をまっすぐに見ることができないのだ。申しわけない気持ちになるのだった。上の人は下の人に、また下の人の上の人に、なすべきこともできず、いたずらに迷惑ばかりかけながら生きていると思うからだった。そうして彼らは不幸にも、追われている犯人のように、誰かと視線が合いはしないかといつも恐怖にかられているのだった。

とにかく、いつまでもそのままにいる決心だというようにぼんやりとこわばった姿勢で、ろうそくの火をながめてすわっているだけの彼ら。魂がぬけた肉体。流れる沈黙。ひろがる静寂。その瞬間、ウオンギユはなぜか自分はいま太古の遺物がいくつか転がっているだけの、名も知らぬ洞窟の奥深く監禁されているような気がして、急に胸がどきどきしてくるのだった。恐ろしかった。全身に拡がっていく鳥肌。すぐ目の前のろうそくの火までが、かすかにゆれ動く幽霊の舌のように醜悪な形に見えてくるではないか。かわきあがる口。流れる冷汗。

「わあっ！」

とウオンギユは大きな悲鳴をあげそうになったが、神様はやはり人間を助けて下さるものらしかった。形勢がここまできると、きつと、

「さあて、どうしたらよいかな」

と、要領を得ないトナムン先生のことばが、ここを、いやウオンギユの気持ちを静めてく

れるからだ。不思議なことだ。やはりこの人たちは生きていたんだなあ。ほっと吐き出す安堵の息の音。と同時にウォンギュは、自分がいま議長である事実と議長としての責任感のようなものを感じて、なにか危機をのがれた瞬間の幸せな気分で、「よし」と膝を打つように、手に握った司会棒でとんとんと小気味よく床を叩くのだ。その音になにか刺激を感じたのか、スンギュとソンジヤとユナはまるで昏睡の密室から出てくるように、深い溜め息の音とともにわずかに顔をあげるのだった。瞬間、胸にこみあげてくるやわらかな感動。しかし、

「さあて、どうしたらよいかな」

質問のようでもあり、歎息のようでもある、トンムン先生の二度目のらちもないことばに、ウォンギュはとまどってしまふのだった。いったい会議の劈頭から何をそうしなうか、いつているのか。実際、具体的にこれといって提起された問題もないのに、その解決方法から質疑するトンムン先生のこの非論理的な発言に対して、しかし、誰一人として異議をとなえるものがないのだ。いちばんの年長者であり、しかも父親であり祖父である、往年の政客トンムン先生のことばだからといって、それにあえて強く反駁を加えられない彼らではないのだ。トンムン先生のことばはたしかに少々あいまいではあったが、しかし彼らにとってはまたとなく実感をともなうて聞えてくるからだ。そうだ。なにをどのようによいのか、かわからないが、ともかく彼らはいま自分達のこの小さな体一つをどうすればよいのか、かわからないのだ。トンムン先生は言うまでもなく、ユナもスンギュもソ

ジャも彼らは漂流中の船に体をあずけた気持でいるのだ。暴風と大波と傾く船首。そのために、膨張する不安と恐怖のかたまりが彼らの頭を乱打しているのか。煤煙のように入りこむ焦燥とめまいと。こういうものに包囲されて、トンムン先生とその一行は一時とて気を安めることができないのだ。どうすれば一日でも愉快に人間らしく生き、歳月をおくることができるのか、全く漠としてくるばかりだ。だからといって、こういう系列からウォンギュだけが気楽にのぞかれるわけではなかった。ウォンギュも事情は同じだ。いや、それどころか、ウォンギュはそれに加えて、トンムン先生のこのらちもない発言に実感以上の、なんと言うか全身をおだやかになでる一種のけだるい快感さえ味わっているのだ。そうはいうものの、ウォンギュがトンムン先生のことばにとまどうのは、別にたいした理由からではなく、ただ自分が議長という立場から、先生のこのあまりにも非論理的な発言をどう処理すればよいのか、全くわからないからだった。ああ、誰か少し代わってトンムン先生の質問に答えてくれる勇士はいないか。しかし、ソンジャもユナもスンギュもみんな困った顔つきで、手のひらで足の甲をさすっているばかりで、誰一人として口を開く様子を見せなかった。えいつ。こんなことがあつてよいのか。たとえ時代が変わり、五倫をわきまえぬまるつきりやくざな子供達の集団であつても、父のことばに黙して答えないとは不敬な態度だ。申しわけない気持に包まれたウォンギュは、いきなり声を発した。

「父さん、何のことですか？」

そういつて父のそのしわくちな尊顔を正面からながめるのだ。

「そうだな」

「父さん、全く遺憾なことです」

「何のことだ？」

「そうですね」

「ウォンギユ、お前は実にこの父にひどいではないか」

「そうです、父さん」

この言葉にトムン先生はあきれた様子だった。うらめしそうな視線でウォンギユをしばらくながめていたが、すぐに顔をそむけてふうつと溜め息をつくではないか。つんと鼻筋にのぼってくるセンチメンタル。たえず民衆の先頭に立って熱烈に祖国統一を叫んでいた、かつてのその旺盛な闘志と気迫は、みなどこへ行ってしまったのか。ウォンギユは自分が子としての立場からより、むしろ同じ一人の人間としての同士感から、過去と比べてトムン先生のこのあまりに小心で無力になってしまった言葉や動作に、言いようのない隔世の感とともに人生の無常さを感じ、同情の念を禁じ得なかった。

「父さん、世の中は実に悪い方に動いていっていると思います」

「それは何のことだ？」

「少し勇気を出さねばならない、と申し上げているのです」

瞬間、トムン先生のひとみを鋭い閃光がかすめる。震える唇。

「なにを！ それではこの父に死んでしまえ、と言うのか」